大和川にアユが戻ってきた！

昭和30年代までは大和川も泳げる川でした。しかし、高度成長期に水質が悪化。川の中にすむ生き物にも影響を与えました。
その後、下水道整備や河川浄化施設の整備、生活排水対策など、流域の懸命な努力によって水質は徐々に改善し、平成23年には4年連続で環境基準レベルをクリアしています。

6年続けて仔アユを確認！

3年続けてアユの産卵場所を確認しました。
平成23年の調査では5～6月に遡上するアユを、11月に降下する仔アユを確認し、河内橋上流、石川橋下流、芝山橋上流では、3箇所でアユの産卵場所を確認しました。

平成23年5～6月の調査で採捕したアユ

清流の代名詞ともなるアユが大和川に住むというと驚かれる方が多くいます。しかしアユは1960年代中頃までは確かに生息していたのです。その後、大和川の水質が急激に悪くなり、姿を消してしまいしました。ところが、2004年と2005年に大和川で捕獲させれたアユを特殊な方法で調べたところ、海から遡上した天然アユだということが分りました。沿川住民の様々な努力によって水質がよくなったからです。大和川には本来大きな河口堰が無く、アユの他にボラやウナギなどの魚やモクズガニやテナガエビなど海と川を回遊する生きものにとって都合の良い川なのです。しかし1954年に河口から17.5km付近に柏原堰堤が建設されてからは、その上流への遡上が限定的になってしまいました。2010年3月に柏原堰堤の右岸側に長さ63m、幅6mの魚道が新設され、その効果を検証する調査が大和川河川事務所によって行われています。平成22年の調査では、アユを含む19種類の魚類と甲殻類6種類が新設魚道を遡上しました。また近年の調査によって高野大橋下流（10.4km）や河内橋付近（7.1km）などで産卵が確認されています。今後、アユの仔魚が育つのに好適な河口域や大阪湾沿岸の環境になること、コケがよく生える石底や産卵場に適した隙間のある砂利底からなる大和川水系をめざすことなどによって天然アユの量はさらに増えていくでしょう。（大阪教育大学名誉教授　長田芳和）